

# 緩和表現としての感情動詞「困る」に関する 言語文化論的考察

王 秋 華\*  
郭 艶 平\*\*  
斎 藤 里 美\*\*\*

言語や文化、民族を問わず人間は「惑・苦痛」の感情を抱くことがある。その感情を言葉で表現する場合、日本語では「困る」がよく用いられる。「喜」に比して「困」や「惑」は、話者が悩み、人間関係における衝突を予想する際の感情といえる。たとえば、自己の言語・行為によって、他者に負担や迷惑をかけ、不快をもたらす場合に「困る」を用いる一方、依頼・誘いを拒否したり禁止・否定の立場を表明したりする場合も「困る」を用いる。このように「困る」を多用する言語文化は、日本語話者の意識と行動を制約している社会的なものであり、日本人に内面化されているものであると考えられる。

しかしながら、こうした感情動詞としての「困る」を言語文化論的観点から考察した研究はまだ少ない。そこで本稿は、これまでの「困る」に関する研究成果を踏まえ、新潮 100 文庫にみる「困る」の用例とその関連表現を対象に、緩和表現としての「困る」の表層的意味・機能から深層的言語意識までを言語文化論的に考察した。

その結果、「困る」の機能は、単なる対人配慮意識における緩和機能ではなく、話者の心情吐露や判断、感情移入、注意喚起、婉曲な禁止、依頼や拒絶など多くの意図を含んだ緩和機能であることを確認した。また、日本人の意識や行動の型と深く結びついた感情動詞「困る」は、言語攻略よりも心情依存を重視する日本語の言語文化の特徴を反映していることが明らかになった。自我抑制の下位者である話者は、「困る」の心情伝達によって、相手の同情や理解及び同意を求めようとしていると推論される。

キーワード：感情動詞／困る／緩和表現／言語意識／心情依存

## 1. はじめに

従来日本語話者は「和」の精神を重んじるとされてきた。コミュニケーションにおいて、話者は聞き手や場面を考慮に入れて、聞き手に柔らかく受け入れられる言葉を選び出すことによって、相手への心的な配慮を表す。その「配慮意識」は、コミュニケーションにおいて、角を立てず、相手が自ら受け止める余地を与えるクッションのような機能を果たす。緩和表現はその言語心理に支配される指標的な言葉であり、言語行動において衝

突を避けるための柔らかい緩衝器でもある。

だが、日本語学習者は伝達情報内容の正確さを最優先に考え、意思の疎通に焦点をあてる傾向がある。それに対して、日本語母語話者は聞き手に受け入れられやすい言葉づかいを選択して、相手の心に余地を与える表現を好む。ビジネスコミュニケーションであるか否かにかかわらず、日常生活でも、緩和機能のある言語表現が多用されている。その背景には日本語の特色、日本人の対人意識などがある。

本研究は、日本人が多用する「困る」を対象に、

\* オウ シュウカ 華中科技大学外国語学院日本語科教授

\*\* カク エンペイ 武漢工程大学外国語学院日本語科講師

\*\*\* さいとう さとみ 東洋大学文学部教育学科教授

緩和表現としての多彩な意味を考察し、言語行動における機能について分析する。さらに、緩和的機能を持つ「困る」という言語表現を通して、日本語の言語文化と言語心理の特性を明らかにしたい。さらに、日本語学習者の「配慮意識」を養成し、緩和表現の訓練をどのように行うべきかについて日本語教育への示唆を得たいと考える。

## 2. 緩和表現

緩和表現は、日本語話者の言語生活においてよく見られる表現である。緩和表現は、ある意味で日本語の特色を宿した表現であるともいえる。緩和表現は言語行動において、ひき起こしうる摩擦をクッションのように緩和する機能を果たしている。また、緩和表現を用いることで、言語行動による不快さや衝突のリスクを回避し、話者の発話意図を達成する可能性を高めるといえるだろう。また、深い配慮が含まれる緩和表現を使うことで、話者の謙遜や誠実さなどの人格的魅力が相手に伝わり、よりよい人間関係を築くこともできる。

## 3. 「緩和表現」としての「困る」について

### 3.1 先行研究と本研究の位置づけ

#### 3.1.1 先行研究

感情表現の研究において、「困る」を焦点に、考察を行った研究はまだ少ない。また、感情動詞にみる日本人の独特な文化・心理・言語意識などについてもあまり論及されていない。

これまでの先行研究において論及された「困る」についての特徴を抽出し、記述してみると、次のようにまとめることができる。

#### (1) 「困る」の他動性について

・困れ〈命令形〉 ・そんなことに困るな〈禁止〉  
 ・それに困ろう〈推量形式〉 ・彼の話は人を困らせた〈使役〉 ・そんなに返答に困られては、こちらが恐縮します〈受身〉 ・それに困ってくれる(あげる)〈授受形式〉 などのうち、〈使役〉と〈受身〉の以外の形は、成立しないという指摘がある<sup>1</sup>。本稿はこの観点をサポートしている。

(2) 寺村(1982)は、「思う」「困る」のような動詞にも感情形容詞と同じ主体に関する制限があることを指摘している<sup>2</sup>。(例文：子供がちっとも言うことを聞いてくれないので困る。)

(3) 彭(2004)は、「してはいけない」「するな」「べからず」「やめろ」の直接的な表現を和らげる

手法としての配慮的な制止・禁止表現の例として、「そんなことなされると、こちらは困ることになります」という「困惑型」を挙げている<sup>3</sup>。

### 3.1.2 本研究の位置づけ

緩和表現の視点から「困る」の意味用法、中国語との比較を考察することを試みた研究はあるが、「困る」の背後にある日本語の言語文化・言語心理などについては論及されておらず、多くの課題が残されていた。そこで本稿は、「困る」の緩和機能に関する彭(2004)の研究およびその他先行研究の成果を踏まえ、「困る」を中心にして、緩和表現としての「困る」の意味・使用機能を、「困る」による日本語の対人関係・言語意識などの面から言語文化論的に考察するものである。

## 3.2 「困る」を研究する目的及び方法

### 3.2.1 研究目的

従来、日本語の感情動詞に関する研究は、少ない。人間の感情と言えば、「喜怒哀楽」を連想するのが一般的であるが、中村明(1993)によれば、喜・怒・苛・悲・淋・鬱・惰・苦・安・悔・昂・感動・好嫌・憎・驚・怖・恥・惑、など多くの感情が挙げられている<sup>4</sup>。このなかで日本語の「困る」は、人間の「惑」の感情を表す代表的な動詞である。

このように、日本語の「困る」は感情動詞の領域において重要な地位を占めているにもかかわらず、これまで感情動詞「困る」を主たる対象とする研究はあまり見られなかった。言葉は、伝達の機能を果たす以外に、話者の心理、その背後の言語文化を表している。日本語の「困る」という表現は、使用頻度が高く、使用場面が多いことから、「困る」は言語心理・言語文化を表す指標的な表現ともいえる。また、「困る」により、多彩な意図やニュアンスが伝達されており、「困る」は日本人の意識と行動の型の特性と深く結びついた言葉だといえる。

さらに、「困る」に含まれている感情・意図を探り出す研究は、日本語における「緩和表現」の研究を豊かにする。緩和表現の視点からも「困る」を考察することは、日本語の言語文化、日本語の対人意識を理解するのに大きな意義を持っている。

### 3.2.2 研究方法

本稿では、新潮 100 文庫の中の商品からとくに、赤川次郎の『女社長に乾杯!』、立原正秋『冬の旅』を取り上げ、さらに『大辞林』などの辞書にある「困る」とその関連表現を検討の対象として、緩和表現としての「困る」の意味、機能及び含まれている微妙な感情・文化的背景などを考察する。

### 3.3 「困る」から「惑」型文化まで

芳賀(2004)によれば「文化の最も核心にある「意識と行動の型」を民族についてみた場合、「民族性」という呼称と概念が登場します。意識と行動の基本傾向としての民族性は、E・フロムらの用語を借りれば「社会的性格」(social character)の一つです。すなわち、ある一つの集団の大多数の成員が持っている性格構造の本質的な中核とも言えるもので、民族の大多数のメンバーによって「分有」され個人に内面化されているものです<sup>5</sup>と指摘されている。これを援用すれば、「困る」を多用することに表れている「困惑」の文化は、その日本人の意識と行動を社会的に制約しているものであり、日本人に内面化されているものであるということが出来る。

たとえば、自己の言語・行為により他者に負担をかけたり不快をもたらすことを「困る」と表現する一方、依頼や誘いなどを拒否したり、禁止・否定の立場を表明したりするのも「困る」と表現する。これら二つの状況は日本人が極力避ける言語行動であると言える。

われわれは日常生活で、他者と離れて孤立した暮らしをするわけではない。そのため、他者に援助を求めたり、止むを得ず他者に迷惑をかけたり、相手にとって不利益になることや不快感を与えなければならない場面は多い。こうした際、相手に働きかける依頼、断り、請求など言語行動において、話者が相手の立場に立ち、相手への負担・不快・迷惑及びひき起こしうる摩擦を予想したり、相手を傷つけないように、相手に好ましい印象を与える言葉選びを工夫するのは、日本語話者によくみられる言語行動である。それゆえ、双方に不快な感情を引き起こす可能性が高い言語行為を遂行する時こそ、日本人が「困る」と呼ぶ心的感情を持ちやすい。

また一方で人間は、他者が期待するとおりに同意したり、行動したりするわけにもいかず、他者

の言語行為にノーと言う場合でも、自分の考えを単刀直入に表明することは日本語話者では稀である。したがってこういうときこそ、どのように人間関係を維持し衝突を緩和させるのか、という点を考慮して「困る」という心的状態が生起し、持続することになる。

このように言語行動の分岐点に立ち、左に行っても「困る」、右に行っても「困る」という状況は、話者が他者の立場に立つ対人配慮意識が働いているからこそであろう。他者を困らせることを極力避け、他者の言語行為による「困る」状況にも対処しなければいけない場が、心と言語の間にワンクッションを置く緩和表現が存在する場である。言いにくいことや相手に不快を引き起こす可能性が高い場合においては、「それは困ります」「お手数ですが」などの緩和表現を用いることで衝突の危険性を軽減することができる。

### 3.4 「困る」の多義性

言語や文化、民族を問わず人間は「惑・苦痛」の感情を抱くことがある。その感情を表現する言葉として、日本語には「困る」がある。「困る」は日本人の「困惑」した感情を担っている多義語である。

日本語には「迷惑」、「面倒」、「当惑」、「惑う」、「困窮」、「困難」、「困惑」、「厄介」、「弱る」、「途方に暮れる」など、意味の上で「困る」と類似する言葉がいくつもある。これだけ多くの類義語が存在することは、日本語話者が「困惑」の感情を繊細に感じ分け、また相手への配慮の際にも念頭に入れていることを表している。

だが、「困る」の中国語訳は厄介である。中国語には「困る」にあてはまる動詞がない。日本語の「困る」には、いくつかの中国語の表現で対応しなければならない。日本語は異なった場面においても「困る」の一語でその意味を伝達することができる。このことは裏を返せば「困る」の多義性をも表している。また、日本語の「困る」は意味の幅が広い。これに対して、中国語では異なった表現で「困る」の意味・感情を伝達しなければならない。下の図は、日本語の「困る」を中国語で表現する場合、どのような表現の選択肢があるかを示したものである。



上の図からも、日本語の「困る」に対して、いくつもの中国語が対応していることがわかる。さらに、日本語の「困る」は肯定形であるのに対して、中国語に訳す際には、「没有办法」、「不行、不可以」などの否定形をとる。このことから、日本語の「困る」は肯定形のままで否定を表す機能を持つということがわかる。

### 3.5 「困る」にみる表現の抑制と心情依存

日本語では、「言わぬが花」「沈黙は金、雄弁は銀」のような諺が好まれることから、日本語話者はくどくど説明することを嫌う傾向があることを読み取ることができる。言語行動において、自己の発言を抑えた少ない言葉で、相手が自分の発話意図と気持ちを察してくれるのを期待している。

日本語には主語が省略される場合もよく見られる。言葉を惜しみ、抑制するところに生ずる言外の意味、余韻を楽しむのである。言葉を惜しみ、余韻を楽しむというのは日本語にみられる嗜好である。

また、日本語話者の言語行動においては、言葉で相手を説得するより、心情伝達で良好な人間関係を築くことが好まれる。すなわち、対人行動において、言語攻略より心情依存を重視する。日本語の「困る」は、たった一語で相手に「惑・苦痛」の気持ちを伝達するため、表現抑制と心情暗示が同時に発生するのではないかと考えられる。以下では、「困る」による心情吐露の形態を考察しながら、その特徴を述べたい。

#### 3.5.1 心情吐露（自己表出）

日本語話者が、「困る」の心情吐露によって、信じてほしいという気持ちを相手に表明する例を挙げてみよう。

僕は、宇野理一の子です。これは、僕が九つ小的时候にこの家にきてから、いままで、ずうっと渝らない事実です。ですから、僕は、いつかも申しあげたように、母さんを大事にしてくれた父さんも大事にしているのです。これは信じてください。信じてくれないと困るのです。<sup>6</sup>

(立原正秋『冬の旅』)

また、次の例も心情吐露の例である。「困る」による心情吐露によって、発話時点における発話者自身の気持ち・心的状態を表出している。ときには独り言のように吐露するが、そこにはコミュニケーションの相手に働きかける発話意図が含まれている。

「主人のやったことが間違っていたのは事実ですが、それは前の社長さんが、そうすればいいとおっしゃったのに従ったわけで、決して主人はそんな悪知恵の働く人じゃありません」

「ええ、それは私にも分かります」

「どうかよろしくご判断いただきたいと思います」と三枝治子は頭を下げる。

「まあ、やめて下さい」

と伸子があわてて言った。「私の方こそ、三枝さんには手とり足とり教えていただいているんです。今辞められては、本当に困ってしまうんですもの」<sup>7</sup>

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

伸子は、「困る」という立場を表明したことによって、三枝に仕事を続けてほしいという気持ちを伝達しているのである。

#### 3.5.2 観察記述（想定・判断）

相手を説得する表現を用いず、「困る」のような自分の心情を相手に伝える表現を多用する日本語話者は、心情依存型の言語文化を持っていると言える。したがって、相手の状況について「困る」を用いる場合は、相手の立場に立ち、現時点の境遇を観察・記述することで、相手の「困る」心情を察していることを意味する。

私は先生のいう事に格別注意を払わなかった。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。

「そりゃ困るでしょう。その位なら今手元にある筈だから持って行きたまえ」<sup>8</sup>

(夏目漱石『ころも』)

「先生」は「わたし」の状況を親身になって考え、「わたし」の「困る」という感情を察知していることを伝達しているのである。また、次のような用例もある。

修一郎は、ズボンのポケットから、用意した一万円札をとりだし、厚子の前においた。厚子がびっくりして修一郎を見あげた。

「亭主が病気じゃ困るだろう。気にしないでいいんだ。とっておいてくれ」

修一郎は誇らしげに言った。

「困ります。こんなものを戴くわけがありません」  
厚子は二つ折になった札を修一郎の足もとに押しかえした。

「いいからとっておけよ。きみがそうやって働いているのを見ていると、なにかかわいそうになってきてな」

修一郎は再び誇らしげに言った。

「どうして、こんなことをなさるんですか？」

厚子が警戒の目を見せた。

「だからよ、きみがかわいそうになってきてな」

修一郎は押しかえされた札をまた厚子の前においた。

「困ります」

「困ることはないだろう。それで、きみ、子どもはいないのか？」

「ひとりおります。……これはほんとに困ります」<sup>9</sup>

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

修一郎と厚子の談話には「困る」が5か所ある。「亭主が病気じゃ困るだろう」という修一郎は、厚子の状況に対する自分の想定や判断、慰めの心情を厚子に伝えたいという感情を抱いている。これに対し、厚子は「困ります」を3回繰り返して、自分の断りを婉曲に伝え、さらに自分の「困る」心情を修一郎に理解してもらいたいという心情を吐露している。さらに次のような用例もある。

悠一は、困った、といった表情を見せた。

「親父には、おじいちゃんから話してくれない

かな」

修一郎は言った。

「わしから話すのか」

悠一はさっきより困ったという表情を見せた。<sup>10</sup>

(立原正秋『冬の旅』)

「困った」という表情を見せることで話者の心情を吐露するとともに、聞き手は相手の「困る」の心情を推測して、そこに場の共有が促されるのである。

### 3.5.3 感情の共有・一体化

さらに、自らの「困る」を表出すること、相手の「困る」を記述・報告することの他に、感情の共有・一体化を促す場合もある。

池上(2007)は「話し手が自らを他者に投影し、その他者になりきって状況を体験する(中略)他人の身になって悲しみを感じるとか、小説の登場人物に感情移入する」<sup>11</sup>と述べている。

例えば、次の例で示すように、一つの状況において、自分も相手も「困る」感情を持つことで立場を共有することがある。

不思議なことに、殺人犯として追われている人間が目の前に、それも手錠をかけたままで現れたというのに、伸子は少しも恐怖を感じなかった。

「本当に一人だろうな？」と、尾島一郎が周囲を見回す。

「見張ってれば、とっくに出て来てますわ」

「そ、それもそうだ」

尾島は、伸子が落ち着き払っているの、ちょっと面食らった様子だ。

「誰かに見られたら困るでしょう。中へ入りましょう」と伸子が言った。<sup>12</sup>

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

「誰かに見られたら困る」と感じるのは殺人犯として追われている尾島だけではない。殺人犯として追われている尾島に会いに来た伸子も同様に「困る」のである。したがってこの談話に参加する二人は、「困る」心情を表出することで立場と感情を共有していると言える。以上のことから、「困る」が持つ意味・機能を整理すると以下のようになるだろう。



「困る」の 意味・機能 (話者の視点)	$\left\{ \begin{array}{l} 1 \\ 2 \\ 3 \end{array} \right.$	1 心情吐露	→	自己表出
		2 観察記述	→	想定・判断
		3 感情移入	→	一体化

びっくりして修一郎を見あげた。

「亭主が病気じゃ困るだろう。気にしないでいいんだ。とっておいてくれ」

修一郎は誇らしげに言った。<sup>14</sup>

(立原正秋『冬の旅』)

### 3.6 「困る」の機能について

「困る」は静態的な動詞だが、「困る」は状態・感覚などを表すだけでなく、相手に働きかける意図を持ち、言語使用において動態的に機能する場合もあることが推測される。以下では、「相手に働きかけない場合」、「相手に働きかける場合」の二つに大別し、対人配慮意識からみた「困る」の機能を明らかにしたい。

#### 3.6.1 相手に働きかけない場合

##### (1) 話者の心境

次の用例は、相手に働きかけることを意図せず話者の心境を述べるにとどまる例である。

「今日はゆっくり間に合うな」

山本が腕時計を見ながら言った。

「道路が割空いてたからな。バスは時間が不定期で困るよ」<sup>13</sup>

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

話者は「困るよ」及び「困ったなあ」のような独り言を言ってストレスを解消することができるが、話者に特定の意図はなく、現時点での自分の心境を述べるにとどまっている。

##### (2) 相手の心理の想定

話し手(言語主体)以外の人間、とくに相手について言う場合、「何か困っていることがある?」「困ったことがあったら、いつでもこちらに来てください」などの表現にみられるように、相手の気持ちを早く察して、他者への配慮を「困る」という動詞によって伝達することができる。相手の心境や起こりうる問題・状況を想定し、その解決法などを相手に提供するというような相談やサポート場面でよく見られる。

##### (3) 話者の判断

前掲の用例の繰り返しになるが、「困る」が話者の判断を表す場合もある。

修一郎は、ズボンのポケットから、用意した一万円札をとりだし、厚子の前においた。厚子が

「困るだろう」という表現で相手の現時点の状況や相手の心情を押し量り、同情・慰めの配慮を伝達する。話者の判断と配慮が「困る」という表現から相手に伝わるのである。次に「相手に働きかける場合」の機能を考察したい。

#### 3.6.2 相手に働きかける場合

##### (1) 軽い注意

次は、話し手が聞き手に対して軽い注意を喚起する例である。

君、困るじゃないか、勝手に私の名前を使って  
(『大辞林』)

これは、相手に対して、「勝手に私の名前を使ってはいけない」という注意を喚起する機能を果たしている。

雨が降ると困るから

(『ニューセンチュリー和英辞典』)

「雨が降ると困るから」という文は、相手に向かって、「傘を持って行きなさい」という注意喚起の役割を果たしている。

##### (2) 強い注意(婉曲な禁止)

「困る」が強い注意もしくは婉曲な禁止の機能を果たす用例には次のようなものがあげられる。

宿泊客以外の両替はちょっと困る

ここでのおタバコは困ります

この場合の「困る」は、「してはいけない」「だめ」「するな」の代わりに用いられている。例えば、喫煙禁止の場合において、直接「だめ」「いけません」「するな」などとは言わないが、「ここでのタバコは困ります」という「困る」の心情伝達によって、話者の立場を相手に理解してもらい、禁止・否定などの対人行動によるショックを緩和させ、そのことを相手に柔らかく伝えることがで

きるだろう。「～は困る」と言う表現は禁止などを婉曲に伝えるためのものといえる。

### (3) 請求・依頼（暗示する場合）

「困る」には、話者の状況を伝え、婉曲な依頼を暗示する機能もある。次の例を見てみよう。

「よろしくお願いします」  
と伸子も微笑んだ。それから、ふっと、  
「あら、困ったわ」  
「何です？」  
「名刺がないわ。そんなことまるで気が付かなかった」  
「馴染みの印刷屋へ言って今夜中に作らせましょう」  
「そんなに早く？」  
「任せて下さい」  
三枝は肯いて、出て行った。——頼りになる人だ、と伸子は思った。<sup>15</sup>  
(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

伸子は名刺がない場合の心境を「あら困った」と表出し、三枝はその気持ちを読み取り、「馴染みの印刷屋へ言って今夜中に作らせましょう」という申し出を行っている。次の例も婉曲な依頼の例である。

谷口は頭をかきながら、「どうもなかなか皆さん正直に話してくれないので困ってしまいますよ。つまり、あの日、マンションへ行ったのは、警察に通報した竹野さんを含めると、尾島さん、奥さん、荒井の四人になるわけだ」<sup>16</sup>  
(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

谷口はみんなに正直に話してくれという依頼を暗示している。このように依頼・請求の場面においても、「困る」という表現によって、話者自らの立場・心情を聞き手に理解してほしいという気持ちを柔らかく伝えることで、相手も自然な形で受け入れ、承諾することが容易になる。

### (4) 拒絶

一方、「困る」が拒絶を表す場合もある。次の用例を見てみよう。

「そうです。従ってこのマンションについては——」

「ちょっと待ってよ」  
晃子はソファに腰をおろすと、「私はここに現実に住んでるのよ」  
「それは分かってます」  
「出て行って、どこで暮らせばいいの？」  
「さあ、それは……」  
「分からない、じゃ困るわよ。私にだって生きる権利はあるんですからね！」  
とても社長の愛人の言葉とは思えない。<sup>17</sup>  
(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

晃子がマンションを出て行くことを拒絶する意図は、「…じゃ困るわよ」という感情表現を付加することで聞き手に伝わる。「だめ」「それは無理です」「それはできません」などの代わりに、「困ります」という一語を用いることで困惑した心的状態を表明し、同時に下位者の立場から断ることによって生じる緊張を緩和させることができるのである。

以上のように、日本語では「困る」という感情動詞を緩和表現として用いることによって、注意喚起及び依頼、請求の暗示、断りなどの意味を婉曲に伝達することを可能にしている。芳賀(2004)は、「他者を気にする日常の結果、日本人では、高い立脚点から深い人間洞察をくだす哲学的人間ではない代わりに、他者の一挙一動、一顰一笑に目を配って心の動きをとらえる“心理的人間”になりました」<sup>18</sup>と述べる。「我を張る」「我が強い」などの表現に見られるように上位者の立場に立つことを避け、コミュニケーションにおいて下位者の立場に立って「困る」の心情を表明したり、相手からの理解、同意を求めるのである。

## 4. 緩和表現を生む日本の言語文化

こうした緩和表現は、日本語話者の言語文化の姿を映している。最後に、芳賀(2004)「日本人らしさの構造—言語文化論講義」の研究成果をふまえながら、「困る」にかかわる日本語の言語文化について考察したい。

### 4.1 他律型の対人意識

芳賀(2004)は「他者を大事にする日本人の思いやりは、英語の sympathy よりもはるかに自分をおさえ、他者の心を推しはかる意識です」<sup>19</sup>と述べている。

「ここでのおタバコは困ります」「今はちょっと困ります」など、禁止・拒絶などを表す場合においてすら、相手の心的衝撃を和らげ、ものごとを柔らかく相手に伝達しようとする配慮、他者を大事にする意識が働いているのである。

## 4.2 察しの文化

日本語には察しの文化が存在するといわれてきたが、「お困りでしょう」という配慮表現を用いることによって、話者の「同情・理解などの発話意図と心遣いを相手に伝達することができる。

一方、前掲の「どうもなかなか皆さん正直に話してくれないので困ってしまいますよ」という文のように、依頼・請求などを暗示する際も、「困る」の心的状態を相手が察してくれるだろうと期待している。日本語に「以心伝心」「一を聞いて十を知る」などの諺があるように、意図を言葉で直接表現しなくても、場を共有することにより、話者の意思を察することが期待されるのである。言いにくいことや相手に不愉快を引き起こす可能性が高いことであればなお、「それは困ります」「お手数ですが」などの緩和表現を用いて、衝突の危険を避けようとする。まさに、日本語の言語行動においては、話者・相手の双方に察しの意識が求められる。

## 4.3 いたわりのマナー

芳賀(2004)はまた「相手の心中を先まわりして察する心は必然的に他者へのいたわりに通じます。他者の気持ちを傷ツケルことを極力避けようとして、言うべきことを率直に言うことまで控えます」<sup>20</sup>と指摘している。

また前掲の「困ったことがあったら、いつでもこちらに来てください」は、相手のプライバシーを尊重しながら、率直に言うことを控えるいたわりのマナーを表している。他者のショックを予想したり、衝突を緩和させたりする緩和表現には、他者への深いいたわりなどが示される。「それは困ります」などの緩和表現には、他者の気持ちを傷つけることを極力避けようとするいたわりがある。

## 4.4 謙譲の美德

相手に対する気配りは、自分が引き下がったり、相手を高める謙譲的な態度を示す緩和表現に見ら

れる。言語活動において、自分を控え、相手に好印象を与える柔らかい表現は、話者のもつ謙譲の人格を反映する。依頼・拒絶などの言語活動においても、傲慢な態度で相手を説得するより、「困ったなあ」「それは困ります」など「困る」の心情伝達による相手からの同意・理解を求めることが望まれている。そこに、自我を抑制する下位者としての謙譲の美德がみられる。

## 4.5 余情の美

「困る」のような緩和表現は、単刀直入な言葉を避け、言外の意味を強調している。「ここでのタバコは困ります」「今はちょっと困ります」「お困りではありませんか」など「困る」の使用によって、注意・拒絶・同情など、話者の意思を間接的に相手に共有させ、相手に想像の余地を残すことになる。いわば、緩和表現による日本語の余情の美ともいえる。言葉を言ひさすことで余韻を残し、他者への気配りと人間的温かさを聞き手に感じさせる。

この文化的な習慣を無視して言語を使用すれば、たとえ文法的に正しくても、相手を不愉快にさせる場合がある。このようなことを避けるためにも、日本語学習にあたっては緩和表現を生む言語文化を理解することが必要である。

## 5. おわりに

### 5.1 まとめ

本稿は、日本人が多用する「困る」を緩和表現の視点から取り上げ、その意味、機能、「困る」に関わる言語心理、言語文化などを考察した。考察の結果は、以下のようにまとめることができる。

①「困る」には表層的な意味と心理状態に関わる深層的な意味との両方が含まれている。したがって中国語には「困る」にあてはまる動詞はなく、いくつかの中国語訳が必要である。翻訳できない場合もある。

③「困る」は、話者の心情や意図を汲んでくれるだろうという期待を含んだ表現である。多くの言葉で意思を伝達することを避ける代わりに、「困る」の心情を相互に共有することが期待されている。

④「困る」の機能には、話者の多様な発話意図が混在している。なかでも、注意喚起、禁止、拒



否及び依頼などを表現する場合によく用いられる。

⑤感情動詞としての「困る」は、言語行動において、相手のショックを和らげ、心理的な準備の時間を与えるなどの緩和機能を果たしている。また「困る」を多用するところに、緩和表現を好む日本語の言語文化が表れている。

以上のことから、日本語教育・学習において、日本語話者の「困る」に関わる言語心理・言語文化を理解することが、コミュニケーションを成功させる一つのストラテジーであると思われる。

## 5.2 日本語教育への示唆

以上のことから、日本語教育においては、「困る」など日本語の頻出表現を文法面から理解するほかに、伝達されるニュアンス、緩和機能を理解しているかどうかということが重要となる。

日本語学習者は、日本語母語話者に比べて相手への配慮意識はあまり高くない。ときには、コミュニケーションにおいて、思わぬ誤解や不快感を相手に与えてしまう場合もある。したがって、日本語教育の現場において、その配慮意識の養成及び緩和表現の訓練が必要となる。

## 5.3 今後の課題

緩和表現は、直接伝えにくい内容を雰囲気や和らげつつ伝える日本語文化の指標的な言葉であるが、その表現や用例は膨大であり、本稿ですべてを検討することは難しい。また、緩和表現には自己防衛、責任回避の行為が共起する場合もある。また「困る」については、好感度を高める一方で、「困る」の不適切な使用によるマイナスの働きもあることなど、未検討の課題も残されている。

本稿で言及していない緩和表現の機能については今後の研究課題としたい。

## 注・引用文献

- 1 劉軼 (2008) 「日本語感情動詞の下位分類」、中国学術論文データベース『中国知網 優秀修士学位論文文庫』<http://www.cnki.net>、2011年12月1日取得。
- 2 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』、くろしお出版、p.151.
- 3 彭飛 (2004) 『日本語の「配慮表現」に関する研究 中国との比較研究における諸問題』和泉書院、pp.3-177.
- 4 中村明 (1993) 『感情表現辞書』、東京堂出版、p.12.
- 5 芳賀綏 (2004) 『日本人らしさの構造一言語文化論講義』大修館書店、p.24.
- 6 立原正秋 (1987) 『冬の旅』新潮文庫、p.302.
- 7 赤川次郎 (1984) 『女社長に乾杯!』上巻、新潮文庫、pp.274-275.
- 8 夏目漱石 (1979) 『ころ』新潮文庫、p.52.
- 9 立原正秋 (1987) 『冬の旅』新潮文庫、pp.123-124.
- 10 立原正秋 (1987) 『冬の旅』新潮文庫、p.65.
- 11 池上嘉彦 (2007) 『日本語と日本語論』、筑摩書房、p.312.
- 12 赤川次郎 (1984) 『女社長に乾杯!』下巻、新潮文庫、pp.69-70.
- 13 赤川次郎 (1984) 『女社長に乾杯!』上巻、新潮文庫、p.17.
- 14 立原正秋 (1987) 『冬の旅』新潮文庫、p.123.
- 15 赤川次郎 (1984) 『女社長に乾杯!』上巻、新潮文庫、p.100.
- 16 赤川次郎 (1984) 『女社長に乾杯!』下巻、新潮文庫、p.164-165.
- 17 赤川次郎 (1984) 『女社長に乾杯!』上巻、新潮文庫、p.134.
- 18 芳賀綏 (2004) 『日本人らしさの構造一言語文化論講義』、大修館書店、p.90.
- 19 同上、p.67.
- 20 同上、p.72.